

新成人の仲間と 成人式典を企画、運営



成人式典検討会メンバー、
佐世保工業高等専門学校出身
淵上 雅世さん

淵上さんは、佐世保工業高等専門学校（高専）をこの春卒業しました。ことしの成人式典検討会のメンバーの1人で、式典では「閉式のことば」を担当しました。

成人式典検討会には、参加してよかったです

成人式典検討会は、市内の学生や社会人の新成人14人で構成され、式典の企画、運営について話し合いました。全国各地で成人式が問題になっていることもあって、お酒などの持ち込みがないよう受付で確認することや決めたり、会場で配布するパンフ

レットのデザインを考えたりしたそうです。

成人式典当日は、検討会のメンバーが、会場となった体育文化館で受付や案内、司会などの運営を行いました。

淵上さんは、「検討会のみならず知り合うことができて、とてもよかったです」と話します。当日は、閉式のことばのことで緊張しましたが、式典が終わったときには、やってよかったという実感を味わうことができました」と話しました。

ことしの市内の新成人は、約二千九百人。式典には、市外在住の佐世保市出身者を含め、約千八百人が参加しました。



成人式典のパンフレット（写真右）の表紙は、検討会のメンバーがデザインしました。

華やかな振りそで姿などに盛装して式典に臨む新成人の皆さん（ことし1月11日）



何か専門的なことを学びたい
と思いき高専に入学

高専に入学したきっかけは、「小学生のときから、算数や理科が好きだったこともありですが、自分には人より勝るものがなかったため、この5年間で何か専門的なことを学びたいと思いました」と淵上さん。在学中には、全国から一般の人や学生が参加して木炭電池で模型の車を走らせる「化学コンクール」に同級生たちと参加したことや、市内の小学校への「出前授業」、高専の校内で行った「公開実験」に参加して小中学生に科学実験の面白さやその方法を教えたことなど、普段学習していることは別の活動も経験できて楽しかったそうです。

「佐世保の人たちは優しいね」と言われました

周りに迷惑を掛けないような大人になりたい

淵上さんは、4月から広島大学工学部に編入します。大学では「無機化学」について研究したいという希望があるそうです。

新成人としての決意などについて尋ねると、「今までは両親に甘えてきましたが、これからは親元を離れ一人暮らしが始まるので、周りに迷惑を掛けないようにしていきたいです」と話しました。

佐世保で日本の本当の良さを知りました



トンガ王国の出身
フォヌア・エレノアさん

エレノアさんは、南太平洋のポリネシアにあるトンガ王国で、トンガ人の父とイギリス人の母の間に生まれました。15歳までトンガで過ごし、ニュージーランドの高校で4年間学びました。高校卒業後、専門学校で観光旅行学を学び、トンガに帰って政府の観光局に2年間勤めました。

今ではすっかり日本人感覚

その後、日本の文部省（現文部科学省）の奨学生制度で来日し、大阪で日本語学校に1年間、観光ホテルの専門学校に2年間通いました。長崎国際大学国際観光学科には、平成13年4月に編入入学しました。

ハウステンボスに魅了された

長崎国際大学に入学した理由を尋ねると、「観光学を教える大学は少ないということもあり、大阪の専門学校から紹介してもらいました。また、大阪の専門学校時代に九州を旅行した際に訪れたハウステンボスがわたしを魅了し、この街に住みたいと思いました」と答えました。佐世保に来た当初は、街の中心部

今後は、日本との友好に役立ちたい



中国江蘇省張家港市の出身
ヨウ 楊 暁宇さん

市内の大学などでは、中国をはじめ世界各国の留学生約四百人（平成15年度）が学んでいます。ここでは、開校後初めての卒業生を送り出す長崎国際大学の留学生2人に、卒業を前にしてお話をお聞きしました。

立をしていくのが大変でしたが、大学の職員や学生、アルバイトの先輩など皆さんに支えられ、今ではすっかり日本の生活にも慣れました」と話す楊さんも、納豆とみそ汁は今でも苦手なのだそうです。

佐世保は第二のふるさと

楊さんは、中国の高校を卒業後、いったん現地で日本の企業に入社しましたが、日本語を勉強するため退社し、蘇州大学に入学。その後、長崎国際大学国際観光学科の留学生として、平成12年4月に来日しました。

美しい海と桜がわたしを歓迎

「来日したときは、大村湾と満開の桜の花がわたしを迎えてくれました。生まれて初めて、桜と海を見たので感激しました。佐世保は大都会ではありませんが、生活に必要なものは何でもそろいますし、九十九島などの豊かな自然も残っていて住みやすい街だと思っています」と楊さん。

しかし、はじめて住む国で勉強を続けていくには、苦労があったようです。「最初は言葉が思うように通じないし、学業とアルバイトの両

佐世保の印象を尋ねると、「皆さん人情が厚く、とてもお世話になりました。ハウステンボスは、アルバイトですつと通ったので愛着があります。たくさんの方が来てくれたらと思います」と話してくれました。

楊さんは、蘇州大学のときからの知り合いだった長崎短期大学の留学生・顧敏燕さんと約1年半前に結婚。この春、妻の顧さんも卒業し、一緒に中国へ帰国します。

中国では、ふるさとの張家港市にある、辻産業（本社・佐世保市）の系列会社で働くそうです。「佐世保に関連のある会社に就職できてとても幸運でした。これからも佐世保とのかかわりが続き、うれしく思います。今後は、日本と中国の友好のため、少しでも役に立ちたいと思います」と抱負を語りました。

「トンガ人も遠慮がちなところがあつて、日本人の性格に近いと思います。大阪では外国人との付き合いが多かったのですが、佐世保では、日本人の家庭に招かれ、日本料理やお風呂、豊の生活を体験するなど、生活の中で、日本の文化に触れることができました」と語ります。最後に、「トンガの文化も誇りに思っています。ゆっくりしたりズムで暮らすことも大事だと思います」と南の国から来た人に戻って、現代社会への注文も。卒業後はトンガに帰りますが、日本にもう一度戻って来たいとのこと。エレノアさんの青く澄んだ瞳と微笑みは、南太平洋のコバルトブルーの海の色と明るい太陽を連想させました。